

# 差別と偏見の現場取材して ～ヘイトスピーチとは何か

講演要旨

安田浩一 先生 (ジャーナリスト)

2015年11月8日

## ◎ジャーナリズムの現場から

皆さんと今日、こういう形でおいでできたことを光榮に思います。

私はジャーナリストとして雑誌、

新聞、時にテレビの現場に関わってきました。記者稼業で事件を追いかける過程で、差別と偏見の問題を語らずして今の日本社会を描くことはできないと考え、取材しているところです。週刊誌の仕事しながら、自分自身にできることは何かと考えてきました。その一つが出稼ぎ外国人労働者の話です。日系ブラジル人など南米の人々、また中国から実習生という形で出稼ぎに来た人々が、日本でどんな暮らしをして、どんな思いで働いて祖国に帰るのか、様々な場所に行つて話を聞き続けてきたのです。

日本にはいまだ、原則的に出稼ぎ外国人が生産現場で働いてよいという法律はありません。電機工場や自動車工場の下請けで多くの外国人が、労働ビザ資格ではなく、ブラジル人やペルー人は日系人だからという理由で、中国人などの場合は研修、実習という名目で働いているの

です。姑息で脱法的ですが、日本は外国人に職を与えることに關して極めて閉鎖的です。実情は労働者であるにもかかわらず、実習生の時給は数年前まで2000〜3000円が当たり前でした。朝から晩まで働いて、ボーナスもなく、休みもほとんど取れません。ひどいと思いました。奴隷と変わらないのです。安い賃金で長時間働かせて休みもない。そればかりかパワハラ、セクハラは当たり前です。

2年前、大阪府下にある、自動車の座席カバーの布地工場を取材しました。朝行くと、中国人実習生を一行に並べて社長が説教して、頬を順番にビンタしていきましました。殴られた中国人は黙つてうなだれていました。「何だ、これは!」と思いました。日本人社員が相手なら、どんなに出来が悪くても記者の目の前でビンタなどしません。「なぜ体罰を加えるのですか」と聞きました。社長は、なぜ悪いのか、ぐらゐの感覚で「安田さん、だって外人でしょう」という言い方をするのでした。素朴で人柄は悪くない社長でしたが、外国人に対しては鈍感無知、というより

差別なのです。新聞記事にもなりましたが、女性に対してはセクハラが相次ぎ、中にはレイプして、そのたびに1万円を渡す社長がいました。ある北関東の地方議会の議長まで務めた人でした。

## ◎ある中国人実習生のこと

2006年、岐阜県の建設会社から中国人実習生が逃げ出しました。彼は四川省に妻子と母親がいて5人家族でした。テレビで「日本に行つて稼ぎましょう」というコマーシャルが流れています。貧困地帯の農村部には日本人と中国人ベアのリクルーターが来て、「この日本人の社長さんについて行けばお金が稼げる」と誘います。せめて子供2人は大学に入れたい、母を楽にさせたい、奇麗な家に住みたい。「3年働けば数百万円たまると吹き込まれ、彼は誘いに乗ったのです。渡航費など100万円を支払うために、借金をしました。

高度な技術が学べると聞いて来たのに、仕事は時給400円の建設現場の下請け雑作業でした。給料からは毎月借金返済分を引かれま